

関西学院大学 研究成果報告

2026年 3月 25日

関西学院 院長殿

所属： 商学部
職名： 教授
氏名： 岩松正洋

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	☒ 関西学院留学 長期（滞在国：フランス） ☐ 関西学院留学 短期（滞在国：） ☐ 宣教師研究期間 ☐ 関西学院外留学（滞在国：）
研究課題	文学的フィクションおよび民間説話におけるプロットシークエンスと発話行為の物語論的研究
研究実施場所	フランス国立東洋言語文化学院
研究期間	2025年 4月 1日 ～ 2026年 3月 4日（ 11ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

本年度、私はフランス国立東洋言語文化学院（INALCO）において、文学的フィクションおよび民間説話におけるプロットシークエンスと発話行為の物語論的研究を目的とする留学を行いました。本研究は、民間伝承と文学作品におけるプロットの継起と発話行為の関連性を、物語論およびフィクション論の観点から明らかにすることを目的とするものです。

とりわけ本研究では、「禁止→違反→罰」という基本的なプロットシークエンスに注目し、そのなかでも「空間的な違反」や「視覚的な違反」といった要素を中心に検討を進めました。この典型例として、シャルル・ペローの「青ひげ」を主要な分析対象とし、秘密の部屋の覗き見という視覚的違反と、それに続く罰の構造について考察を行いました。

現地到着後は、研究の進展に伴い、おとぎ話の書物起源説（すなわちおとぎ話が口承ではなく出版文化の中から形成されたとする見方）についての積極的な検証へと研究課題を拡大しました。同時に、口承起源説という誤謬がどのような思想史的背景のもとで成立し、現在に至るまで支持され続けているのかについても関心を広げ、その形成過程を明らかにするための資料収集を行いました。

研究の性質上、日本文学および比較文学関連の文献へのアクセスも重要であったため、研究拠点を東洋言語文化学院に置きつつ、パリ第3大学比較文学科の協力も得て研究を進めることができました。両機関の図書館および研究環境は極めて充実しており、国際的な研究交流の中で多くの知見を得ることができました。

資料調査のための現地滞在としては、まず2025年4月に、おとぎ話モチーフがアール・ヌーヴォー美術に与えた影響を調査するため、フランスのナンシーに滞在しました。装飾芸術や建築意匠の中に見られる幻想的モチーフを確認し、文学と美術の相互関係について理解を深めることができました。

2025年7月には、18世紀のヘルダーに始まるNaturpoesie（自然詩・自然文学）の思想が、ドイツおよび英国ロマン派周辺の文学者・人文学者に与えた影響について調査しました。あわせて、グリム兄弟による民話収集の戦略と、その後継者ともいえるハンス・クリスチャン・アンデルセンの文学的営為についても検討するため、カッセル、ハンブルク、ベルリン（ドイツ）、コペンハーゲン、オーデンセ（デンマーク）、マルメ（スウェーデン）に滞在しました。各地の博物館や資料館において一次資料に触れることができたことは大きな成果でした。

また2025年7月から8月にかけては、17世紀の印刷文化の状況と、19世紀ジュール・ヴェルヌ作品に見られるおとぎ話的モチーフの関連を調査するため、フランスのナントに滞在しました。出版文化の発展と物語ジャンルの形成との関係について理解を深める貴重な機会となりました。

2025年10月には、フランドル美術とロマン派絵画との関連を調査するため、ベルギーのリール（Lier）およびアントウェルペンに滞在しました。さらに2025年11月には、ポルトガル王室と海運の歴史的関係を調査するため、リスボンに滞在し、大航海時代の文化的想像力がおとぎ話的想像力とどのように関係するかについて知見を得ました。

留学期間中には、研究成果の一部を学会等で3回発表する機会にも恵まれました。2025年5月にはRELIJAMにおいてプシュケ物語と青ひげモチーフの関連について発表し、2025年9月には同じくRELIJAMにおいて落語「死神」のグリム童話起源説および明治期探偵小説との関係について発表しました。さらに2026年2月にはパリ第3大学において、おとぎ話の書承起源説とロマン派における伝統創造の問題について発表しました。いずれも活発な議論を得ることができ、研究の深化に大きく寄与しました。

また、研究活動の一環として、兵藤裕巳著『物語伝承論』（青土社、2025年）の書評を執筆し、口承文芸学会の学会誌に寄稿しました。専門領域の最新研究を整理し、自身の研究との関係を再確認する貴重な機会となりました。

滞在中は、フランス特有の音楽教育手法であるconte musical（音楽物語）を2度観覧し、音楽・語り・演劇が融合した独特の表現形式について取材することができました。また、『千一夜物語（アラビアンナイト）』に関するシンポジウムにも参加し、国際的な研究動向を直接知ることができました。さらに、美術館、演劇、映画、コンサートなどの現場におけるおとぎ話モチーフの実例調査や、17世紀フランス関連の史跡調査も行うことができ、文学研究を文化史的文脈の中で捉える視野を広げることができました。

以上のように、本留学は研究に没頭することのできた極めて有益な一年となりました。現在は、留学中に得られた研究成果の文字媒体での発表に向けて準備を進めております。今回の成果を今後の研究および教育活動を通じて還元していくことで、ご支援に報いていきたいと考えております。

報告用紙①

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間の大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。